

【緑地を楽しむ本】

『忘れられた日本人』

宮本常一

岩波書店



本書は、民俗学者宮本常一が、戦前から戦後にかけて主に西日本の各地を訪ね歩き古老たちから聞いた話を、今から60年ほど前の雑誌に連載したものがもとになっています。

宮本さんは人の話を引き出す天才だと思います。記録された人々の話は具体的で生き生きとしていて、山間や海辺の村で人々がどのように共同体を維持していたのかがイメージしやすく、面白く読むうちに、その知恵や慣習に感心させられます。女性たちも冗談を言いながらたくましく労働に励みます。若い女性だけで旅することもあったようです。

私が特に興味をひかれたのは「世間師」と言われる人々の存在です。農家の二、三男が大工・木挽・石工・水夫などの仕事を求めて他郷に働きに出かけ、渡り歩いていくのです。宮本さんは「日本の村々をあるいて見ると、意外なほどその若い時代に、奔放な旅をした経験を持ったものが多い。」「行動的にはむしろ強烈なものをもった人が年寄りたちの中に多い。」と書いていま

す。こういう人々は時代に対して敏感であり、その人々を受け入れることで村々は新しい方向付けをしていくことができたということです。

本書の中で一番有名なのは「土佐源氏」と題された橋の下への乞食小屋に住む80歳過ぎの盲目の男の独白でしょう。具体的な内容の紹介は差し控えますが、信じられないような劇的な話です。今風に言えばホームレスの彼の、内面のこの深さは何なのでしょう。もしかしたら彼は大ボラ吹きなのかもしれない。どちらにしても只物ではない。これを読んで私はうなっていました。

本書が出版されたのは私の生まれた頃であり、当時はここに登場するような人々が確かに方々で生活していたはずなのに、東京下町で生まれ8歳で鶴川に引っ越してきた私にとって、この本に書かれていることは異文化ではかありません。「へえー」と感心しながら読む体験は、異国を旅しているようでした。本書に登場する人々が「忘れられた日本人」なら現代に生きる私たちは「断ち切られた日本人」なのでしょう。近代というのは寂しい時代です。

(蔦谷)